

3、博物館40周年記念特集

1. 開館40年をふりかえって

2. 40周年記念寄稿

●「開館40年のあゆみ」

朝日 保 （元士別市教育長/元士別市立博物館館長）

●「博物館開館40周年を記念して」

大谷 優子 （士別市立博物館協議会）

●「博物館とともに歩んできた40年」

平松 和彦 （士別市立博物館特別学芸員）

●「40年を振り返って」

水田 一彦 （前士別市立博物館館長）

●開館 40 年をふりかえって

士別市立博物館は 2021 年で開館 40 年となりました。当時、士別市郷土研究会を中心とした地元の方々の強い後押しによって建設され、現在に至るまで多くの方に支えられてきました。これからも当館が地域と共に歩み続けていくためにも、40 年という節目で、今までの博物館のあゆみをささやかながら振り返りたいと思います。また、当館に長く携わっていただいている 4 名の方に、それぞれのお立場から振り返る内容でご寄稿いただきました。

士別市立博物館 40 年のあゆみ

1978(昭和 53)

6 月 郷土博物館設立準備室発足

1981(昭和 56)

7 月 士別市立博物館落成式

1982(昭和 57)

6 月 登録博物館認可

10 月 屯田兵屋落成式 (つくも山から移転)

11 月 特別学芸員制度発足

1983(昭和 58)

2 月 博物館広報紙「コミュニケーション」発刊
(途中から「博物館だより」に改称)

3 月 博物館報告創刊号発刊

1989(平成元)

3 月 郷土学習シリーズ第 1 集発行
(以降、1996 年までに全 7 種発行)

11 月 公会堂展示館オープン

1994(平成 6)

3 月 北方圏、北極地域資料室改装オープン



2000(平成 12)

4 月 常設展示《士別地方の地質コーナー》設置

2001(平成 13)

5 月 博物館ボランティア友の会発足

2002(平成 14)

12 月 常設展示《天塩川流域の淡水魚コーナー》設置



2011(平成 23)

4 月 常設展示リニューアルオープン

2021(令和 3)

4 月 休館日変更



※主に施設の運営に関する内容を抜粋。その他事業等の内容については毎年度発行の士別市立博物館報告をご参照ください。

開館 40 周年のあゆみ

朝日 保（元士別市教育長/元博物館館長）

士別市立博物館が開館 40 周年を迎えられるとお聞きし、色々な立場で開館にあるいは運営に携わってきた者として、当時を思い起こし誠に感慨深いものがあります。

昭和 44 年、士別に戻った私は市役所奉職の傍ら士別市郷土研究会に入会しました。

当時は、産業・生活などあらゆる分野での一大変革期であり、使われなくなった生産・生活用具などが大量に放置されておりました。

会では、このような開拓当時からの貴重な資料を後世に残そうと収集活動を続けて来ましたが、その保管・展示場所が必要となり、さらに、「士別よもやま話」の相次ぐ発刊等による市民の歴史の掘り起し、動植物や地質など調査研究活動を通じて明らかになった成果を市民に提供する場の必要性が高まり、昭和 53 年「士別市立博物館建設促進期成会」が発足しました。

当初は、資料の展示を主とする郷土資料室的なものが考えられましたが、市民の熱意と当時の理事者の理解により、正式に博物館法による学芸員を置き調査・研究、教育普及活動を行う登録館を目指すものとし地方の小都市では先駆的なものでした。

私は当時、市役所では國井市長の秘書係長、郷土研究会では事務局長を担当しており行政と市民団体両面から携わることになりましたが、課題は展示テーマの設定と建設場所の選定でした。

「ふるさと士別の歴史」と「天塩川流域の自然と文化」は当然として、地理的な士別の位置を考え、厳しい環境の中で生きる北方の国々の人々の生活と文化を紹介する「北方圏」が展示テーマに加えられましたが、これは、当時全国雪寒都市協議会の会長であった國井市長の強い思いのもとに、北海道が進めていた「北方圏構想」とタイアップする画期的な発想でした。

建設場所についても誰でも気軽に行ける町中にとの意見が主流でしたが、どうせ作るなら士別のシンボリック建物として、当時建設が進んでいたグリーンスポーツ施設の一角の市街からも俯瞰できる場に決定し、デザインも市長が北海道の北方圏視察の団長としてスイスで目にしたガラス張りの三角垂の建物の印象が基に設計されました。

「北方圏」をテーマの一つに加えたのですが問題は展示物で、目玉になるものがなく苦慮していたところ、北方圏市民ジェットがアメリカ・カナダに派遣され、郷土研究会から藪中、岡田理事が参画しました。

派遣中の藪中理事から夜中に私の所に国際電話が入り「文化財級の素晴らしいカナダインディアンの資料が 140 万円で手に入る。買ってきていいか」とのこと。藪中理事の弟がバンクバーに在住しており、手配してくれていたものでした。

行政では急に対応できないため郷土研究会の理事会を緊急開催、渡辺会長の「良いものなら買ってこい。金はなんとかする」との一言で購入が決まった。市内のデパートがスポンサーになり買い取り、市に寄贈するという形がとられ、極めて貴重なカナダインディアンの男女衣装、装束一式が展示室正面を飾ることとなりました。

昭和 62 年の人事異動で私は、突然、博物館勤務を命じられました。

前学芸員が異動し学芸員の資格を持つ者は私しかいないとのことであったが、資格はあるものの学生時代趣味でとったもので専門の分野も無く、博物館事業の経験も無く、まさにペーパードライバーであり、しかも学芸員兼務の館長であった。

喫緊の課題は、7月に予定の「消えた農機具展」の開催準備。当時のメインの特別展は1階の常設展示を換え、ポスター、チラシの作成から解説書、図録まで発行する本格的で大掛りなものであった。

しかも、準備期間が3か月も無いのに何も手が付けられておらず、まずは農機具の勉強から始まり、展示資料の選定・整備、ポスターや30ページ以上の図録の作成等々の作業が迫っていた。

このような事情を察し、日頃は事業に参画しない事務職員はもとより、臨時職員の窓口担当の女性職員や館内外の維持、清掃等に従事している職員も総出で手伝っていただき、郷土研究会会員等の協力もありどうにか開催することが出来た。

この職務、職種を越え、関係団体の協力のもとに一体となったオール博物館体制による事業の推進は、その後の博物館運営に大きな役割を果たす貴重な経験でした。

開館7年目、当初の熱気も薄れ入館者も半減していたが、職員総出で知恵を出し「我が家の逸品展」「阿部晃工彫塑展」「北の刀工大束秀次展」など市民の興味・関心の高いテーマの特別展の開催、特別学芸員の全面的協力得て市民のニーズにあった「少年自然教室」や自然観察会、各種講座などを積極的に開催し、入館者も安定して年1万を超えることができました。

また、特別学芸員会議での提案により、それぞれの専門分野を生かし「士別の野鳥観察」「士別の植物」「士別の蝶」などこの地方独自の自然図鑑をシリーズで発刊し学校教育にも活用していただくことも出来ました。

平成元年には、「士別市開基90周年」を記念し士別市の文化財であった旧公会堂を博物館に隣接し復元、美術館的役割を持つ「公会堂展示館」として11月開館することになりました。

今後の館運営やオープニング飾るセレモニーについて小池暢子先生にご意見いただくと、即座に版画を主にすること勧められ日本版画協会に連絡をとってもらい当時協会総務の小林敬生先生とお会いし全面的な協力を約束していただきました。

開館には日本美術家連盟理事長の北岡文雄先生をはじめ日本を代表する版画家の方々にご来士をいただき「日本版画協会士別展」、版画セミナー「現代日本美術における版画につ

いて」を開催、盛大にオープンを飾ることができましたが版画協会とのご縁が今に続いていることは喜ばしく力強い限りです。

退職後は博物館ボランティアとして出入りさせてもらいましたが、長い市職員時代、一番楽しく充実して仕事をさせて頂いたのが博物館であり最も思い出の多い愛着のある職場でした。

職員の皆さん、特別学芸員、協議会委員や博物館を支え協力いただいた多くの皆さんに心から感謝しております。

今、行政改革が進む中で博物館の立場は非常に難しいものとなってきております。

現在、若い優秀な学芸員を迎え、この地方の文化の発信地として大きな役割を果たしておりますが、この誇るべき市立博物館を作り支えてきた多くの人々の思いに馳せ、この博物館が一層市民のニーズに応えた活動を推進し発展されていくことを心から願っております。

博物館開館 40 周年を記念して

大谷 優子（士別市立博物館協議会）

平成3年から約30年間博物館にかかわらせて頂いています。関東から結婚を機に士別の住人になったものの士別の事、北海道の事何も知らなくて、当地の知人も誰もいなくて、博物館との出会いは社会参加の第一歩でした。

最初の頃は「郷土研究会」の方が多く、山田伍市さん、福万清一さん、荒木正一さん、塚本熊雄さんらから、沢山の士別のお話を聞かせて頂きました。いろいろな分野の方々からお話を聞けるのも博物館の魅力の一つです。特別学芸員の堀江先生からは士別の山肌から、その時代、なんの植物が育っていたか等、何気なく見えた士別の自然が知れば知るほど、キラキラ輝いて見えました。天文に詳しい方、きのこに詳しい方、植物昆虫に詳しい方、野鳥に詳しい方からワクワクするお話を聞けるのも博物館ならではの魅力です。

最初の頃は道内の博物館や施設に研修に行って資料保存展示方法や目標課題を語り合いました。その当時士別では皆様から寄贈された品々の修理保存展示が課題でした。

士別の博物館は郷土資料館の役目からスタートして美術館、科学館等様々な顔を持っています。以前は郷土学習シリーズ等の小冊子を発行したりしていましたが、現在の博物館の魅力を、どうやって皆様に知って頂くかが課題です。士別の自然、士別の中に眠っている色々な知識を持った方々という宝物を多くの方に知って頂いて、大事に次の時代に繋いで行けたらと思っています。

何かに興味を持った時、とりあえず博物館に行って疑問を投げかけてみたら、その場で解決できなくても、きっと手繰り寄せるヒントをもらえるかもしれません。そんな風に、もっともっと博物館を身近に利用して愛して頂きたいです。博物館の一ファンとして、こちらから願っています。

博物館とともに歩んできた40年

平松 和彦（士別市立博物館特別学芸員）

1982年の5月、私は教員として士別市に着任しました。その後、石川誠学芸員（当時）から特別学芸員（以下、特学と略記）として博物館の活動に協力しないかという打診を受けて、1983年の4月から現在に至るまで様々な活動に関わることになりました。

博物館は自然科学から人文科学までの広い領域にわたって啓蒙活動をする役割を持っていますが、複数のエキスパートを抱えている大きな博物館とちがって、地方小都市では専属の学芸員の配置が一人だけのことが多く、あらゆる分野をカバーすることはできないのが実情です。ですから近隣に在住する特学が、多分野にわたる仕事の一端を担うという体制は、なかなか優れた仕組みだと感じました。

当時は博物館とおなじく、剣淵川の西岸の丘の上に士別高校（現・士別翔雲高校）の校舎が建っていましたので、職場からの行き来にも便利で、博物館の施設と周辺の豊かな自然は、私にとって欠くことのできない大切な空間になりました。

まず、博物館活動を通して得られた4つのこと、「話す」「書く」「研究調査」「交流」の順に、個人的なエピソードを交えながら振り返ってみたいと思います。

特学として担当する第一の仕事は、博物館主催のさまざまな行事の参加者に対して、「話す」ことです。他の特学の方々と同じく、市民向けの行事には講師として協力し、わかりやすく解説することが要求されます。大学時代に専攻したのが地質学だったので、私が担当したのは「自然探訪ツアー」や「高山植物観察会」が主でした。地域の自然を巡るツアーでは、近くの露頭（露出している地層の断面）までバスで移動して周氷河地形などについて解説しました。設立間もない時期ですから、博物館から西方、学田方面へと抜ける道路の脇には、新鮮な露頭が残っており、氷期の寒冷環境のもとで形成された土壌の擾乱（インヴォリューション）が観察されました。これは、士別で得た研究テーマのひとつになりました。

自然探訪ツアーのほか、講師の一人に加えていただいた高山植物観察会では、植物についてはこの分野の泰斗、堀江健二先生（特学）が懇切丁寧に解説されたあと、地質や地形について補助的な説明を加えるというのが常でした。

他に市民向けの仕事として依頼されたのは、11月に開催される「文化講演会」で研究の一部を紹介することです。1983年の講演会では4名が登壇、石川誠学芸員は専門の考古学に関する話題を提供し、私は「士別周辺の周氷河地形」について話しました。まだ30歳前後の青二才が市民の方々を対象に講演をすること自体、今思い起こせば冷や汗ものですが。しかしながら、このような機会を与えてくださったことは「きちんとした知的基礎体力をつけろ！」と叱咤激励されているようで、自分自身を鍛えてくれる道場にいるようでした。

第二は「書く」という仕事です。最初の数年間は博物館が「コミュニケーション」という4ページくらいの広報誌が士別市全戸に配布されていました。これに士別の自然について文章を書かせていただいたほか、表紙を飾る写真を何度か提供させていただきました。

毎年刊行される博物館報告は、発刊からしばらくの間は横書き2段組みのフォーマットで、石川さん手書きの原稿用紙のコピーが送られてくると悪戦苦闘の毎日が始まります。しかし少々の無理をしながらでも執筆したことは、後になって大きな喜びを得ることになります。1989年から郷土学習シリーズの刊行が始まり、「博物館周辺の自然観察」では地形・地質の部分を執筆しました。これに掲載するために剣淵盆地の全容を俯瞰できる撮影ポイントを探してまわり、当時珍しかったパノラマ写真専用のフィルムカメラを手に丘の上まで駆け上がったのも今となっては良い思い出のひとつです。

第三は「研究・調査活動」です。着任した当時、厳寒期には -30°C まで気温が下がることが珍しくなかったので、「寒さ」を理科の教材にすることを考えはじめ、積雪の少ない場合にはどの程度地表が凍結するのかを調べることになりました。かつてスキー場になっていた学田の丘陵の一部には、風のため積雪の少ない地点がありましたので、ここで土壌の凍結の深さを観測することにしました。雪は断熱材、つまり「掛け布団」の役割を果たすので30cm前後の積雪があれば地表は凍りません。積雪が少ない場所では、地表がどの程度凍るのかを測定するわけです。1988年には地中温度の測定を目的に、自己記憶型温度計を北大低温科学研究所から借用し、朝日保博物館長（当時）をはじめとする市役所の職員の方々のご協力を得て設置しました。しかし残念なことに野ネズミに齧られてコードが断線するという不運にみまわれ、期待していた温度データが得られませんでした。ご協力いただいた方々には今でも申し訳ない気持ちです。



さらに「人との交流」を通して得られた研究活動についても触れておきたいと思います。毎年5月に特学会議が開催されて異分野の方々と活動について話し合いをするのですが、この会議をつうじて多くの方々と知り合うことができました。どの博物館もその性格上、郷土研究会との連携が不可欠なのですが、とりわけ士別の郷土研究会は博物館行事とも深くつながっており、当時郷土研究会の会長でもあった特学の荒木正一さんからは、上川地方の防雪林や士別の林業の興隆期についての知見を得ることができました。特学会議のあとはお酒をともなう交流会が開催され、この場で交わされた議論もたいへん有意義でした。共同研究を実施する際に、比較的容易に賛同を得られたのもこうした博物館の外でのお付き合いがあったからこそだと思います。少し大がかりな研究を遂行するためには、必要な器材を入手する資金が必要不可欠ですが、助成事業に応募してもなかなか採択されません。ようやく1996年に水田一彦学芸員（当時）の書類作成のご尽力が稔って、「天塩川上流域

の自然調査」に対して北海道新聞社の研究助成が得られることになり、特学の面々がチームとして調査に従事する運びとなりました。調査の一環として天塩川を源流までさかのぼることも実現し、その様子はビデオ映像に記録されて後日博物館で公開されました。2005年の士別市と朝日町の合併によって天塩川の上流域がすべて士別市に含まれることになりましたので、この流域の自然を扱った展示は、今後も士別市立博物館の柱のひとつになるべきだと考えています。今はコロナ禍のため対面での会議が困難な状況が続いていますが、当時のように特学の面々が和気藹々と談論風発できる時間が戻ることを祈るばかりです。

挙げればキリがないのですが、以上とりあげた4つの事柄は、博物館にとって欠かせない基本的かつ本質的な仕事です。常駐の学芸員の方々には市内の学校へ出前授業や、収蔵庫の整理に追われるなどの事務的な作業を含めて、多くの仕事があります。あまりに仕事が多岐にわたるため、私が知る市外の博物館に勤務する多くの学芸員は、少々おもしろおかしく自身を「雑芸員」と語ることがありますが、笑ってばかりではられません。そもそも社会教育施設ですから市民向けの啓蒙活動が中心になるのは当然ですが、学芸員による地道な個別研究が土台になって、さまざまな博物館行事やアウトリーチ活動が成立していることを、市民の皆さんには理解していただきたいものです。日頃から博物館そして学芸員の本来あるべき姿の一端を示したいという気持ちがあったものですから、現地の測定調査に専属の学芸員が加わってその成果を博物館報告に掲載する際には、共著の形をとりました。

この40年間、長期的に人口減少が続く地方都市の公共博物館が、いずれも財政の逼迫に直面している中で、開館時1人だった学芸員を増員して2人体制にしたことは、士別市の英断であったと思います。それぞれの専門性が存分に活かされることによって、この博物館ならではの個性がより際立ってくることを願っています。

最後の最後に、長い活動のなかで忘れられない、ごく個人的な二つの思い出に触れたいと思います。20年も前、書店で偶然目にした「日本の地形2・北海道」（東京大学出版会）のページをめくってみると博物館報告に載せた論文が引用されているのを発見、喜びがこみ上げました。また「日本の地質1・北海道地方」（共立出版）でも引用されて、活字の形で記録を残しておくことがいかに大切なことか、つくづく思い知らされました。

もうひとつはここ数年のことですが、士別高校の卒業生がお子さんを連れて博物館講座に参加してくれたことです。この厳寒の土地に赴任したことがきっかけになって雪氷科学と向き合うことになり、雪や氷の実験を子どもたちに伝えられる幸せを、あらためて強く感じる事ができた瞬間でした。

これまで積み重ねてきた博物館主催の事業の数々は、企画段階から実施にこぎつけるまで学芸員をはじめとする多くの方々のご尽力の賜物ですが、記録や来館者の記憶をとおして次の世代へと伝承されていくことでしょう。あらためまして開館40周年、おめでとうございます。今後のご発展を祈りながら、ひとまずパソコンのふたを閉じたいと思います。

40年を振り返って

水田 一彦（前士別市立博物館館長）

士別市立博物館が開館したのは、1981年7月のことです。士別に屯田兵が入植して開拓が始まってちょうど80年を迎えた記念として建築されました。このころの市人口は、30,000人でお隣の名寄市と並んで道北地域の中核都市として繁栄していました。あれから、博物館を取り巻く状況は、人口減少や朝日町との対等合併など環境が大きく変化しております。そこで、40周年を迎えるにあたり、これまでの出来事を振り返り、博物館の存在意義を再確認し、これからも存続していくための方向性を示唆してみたいと思います。

そもそも開館する当初のころ、士別に博物館が必要だったのか。近隣の他町村だけでなく上川管内には、郷土資料館はありましたが、本格的な博物館はありませんでした。当初、博物館の建設が郷土研究会の発案により、建設運動が盛り上がる一方で、士別市の規模では、時期尚早で、「郷土資料館で十分ではないか？」という意見もたくさんありました。それでも、学芸員を配置した博物館を建設したのです。私は、オープニングセレモニーの祝賀会の冒頭に当時の中垣教育委員長が祝辞で述べた言葉が、未だに脳裏を離れません。それは、「博物館がオープンしたけどもこれでよかったとはならない、これからこの博物館をどのように活用していくかが問われる。今後とも活用の方法を考え、使ってもらいたい。これだけの高額な費用をかけて作ったものが無用の長物といわれぬように願っている。」この先行きを心配する言葉は、これまで常に問いかけてきたことで在り、これからもずっと問い続ける宿命ではないでしょうか。

では、士別の博物館の目玉といえる特徴はなんでしょうか。これまでの40年間を振り返ってみましょう。例えば、最北最後の屯田兵による開拓の始まり、日本で4番目に長い天塩川の自然、というところがあげられるでしょうか。でも、これだけでは市民に、存在意義を示す強烈な印象を与えているとは思えません。所詮、常設展示は、日本にここだけにしかないものがあるわけではないので、一回見ればいい、5年もすれば、一度は見学にいったことになり市民に飽きられてしまいます。

そこで、なんとか利用者や見学者を増やすために目をつけたのが、自然観察会や歴史講座などの教育普及活動です。それこそ森羅万象の出来事を対象にあらゆる活動を手がけ専任の学芸員を中心に、特別学芸員制度をつくり多様な要望に応えられるように人材を確保しました。活動をサポートしていただくボランティアの育成にも尽力しました。その結果は、博物館はおもしろいことをするなという印象をもたれるようになりました。これらの事を経過して40年が過ぎますが、人材と予算の削減により事業の縮小化は顕著です。

この先心配なのは、やはり、人口減少と財政逼迫により運営できなくなることです。やむを得ず閉館することにならないよう、もがき苦しみながら館の活動を続けていくことになるのでしょうか。博物館の近くには、立派な墓標が整然と立ち並ぶ士別霊園があります

が、その存在はまるで未来の博物館の姿を現しているかのようです。「そして誰もいなくなった」、「立派な石碑はあるが人がいない」で終わることのないように、今後とも運営していきますが、市民のみなさまのご指導、ご支援があればこそ、博物館は存続していけるものと思っています。これからもよろしく見守りください。